

Title	戦争の本質
Author(s)	高田, 保馬
Citation	経済論叢 (1940), 51(5): 36-51
Issue Date	1940-11
URL	http://dx.doi.org/10.14989/131468
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號五第 卷一十五第

月一十年五十和昭

紀元二千六百年記念論文集

戦争の本質

高田 保馬

一

戦争について若干の考察を加へよう。戦争とは何であるか、換言すれば其本質は何であるか、それをひき起す動力は何であるか。まづその本質を考へよう。戦争は何よりも集團的争闘關係である。勿論争闘は武力によつて營まれる。その目的とするところは相手の意志の排除であり、従つてその克服、自己の意志の貫徹である。かくて、戦争は集團間の武力的抗争間の關係であるといひ得る。相手の意志の排除はつねに抗争一般に於て求めらるるところであるから。學者の戦争の定義の中には、戦争の主體を以て國家又は國民又は民族となすものがある。勿論戦争を行ふ主體は大抵の場合に於て國家であり、又は其背後にある民族である。けれども常に必ず然りといふことは出来ぬ。一方には國內の戦争たとへば内亂がある、他方には民族の一部分のものが私的集團として戦争を營む場合がある。倭寇の如きは最も顯著なる一例である。従つて戦争の主體として國家又は國民のみを擧ぐることは狭きに失する。戦争の主體としてあげらるべきものは一定の集團である。勿論このことはその集團の全部が争闘の活動に入ることの意味しない。次にこの見方は戦争を一の關係として見るのである。これには若干の説明を要しよう。

戦争は屢々構成體^{グロウパ}または構成物であると稱せられる。ところで、一般の見方からすると戦争は集團間の武力による相互的活動である。勿論戦争をその何れであると見るかは人々の自由である。けれども、例へば奉天の會戦はそれだけ獨立したるものとして之を理解しその真相をつかむことは出来ぬ。むしろ日露戦争の全面をつかむことによつてはじめて其輪郭を明にし得る。ことに社會學的研究に於て、肯定的なる關係の側に於ては集團又は團體といふ構成體が、即ち形象が考察の對象となる、それゆゑに否定的關係の側に於ても何等かの構成體がとり上げらるべきであると思ふ。さうすると戦争はその最も代表的なるものである。かゝるものとしての戦争は上海の市街戦又は徐州の會戦や重慶の爆撃ではない。これらを包括して更に高次なる性質をもつところの持續的な關係である。砲火相見えす兩國睡眠をつゞけてゐるときといへども、戦争は依然として存續してゐる。要するに構成體としての戦争はその長さからみて一の持續的な關係であり、それが時々に争鬭といふ武力抗争の相互作用となつてあらはれる。その廣がりから見ても、兩軍相見える戦場だけが戦争に入りこんでゐるわけではない、近代の總力戦といふ觀念が示してゐるやうに、集團のあらゆる方面の活動がその一部分として、その助力者として織りこまれてゐる。實に戦争は戦に非ずして戦を中心とする争である。たゞき合ひそのもののみならず、これを中心とする双方の抗争が意味せられてゐる。構成體としての戦争には勿論戦争する双方の集團が一括せられる。これらの虚々實々の相互作用、全集團をあげての緊張と努力と用意。これらのものがすべて組織せられ錯綜せる聯絡に入りこんで戦争といふ一大構圖、といふよりも一大シネマともいふべき動的統一が形づくられる。此意味に於て戦争は單なる武力的争鬭のみをさすのではなく、これを中心として組織せられたる關係の統體ともいふべき

ものである。

二

戦争の何であるかを述べた。次に何がこの戦争の動力であるかを明にせねばならぬ。戦争原因として經濟上の利益の爭奪といふことが屢々述べられてゐる。ことに經濟的なる歴史觀の弘布とともに此考は殆ど一般的のものとなつてゐる。けれども、戦争はさういふ經濟的利益の衝突から直に起るものでもなければ、又そのみが刺激乃至機會となるのでもない。逆説的にきこえるかも知れぬが戦争は結合即ち社會の結果である。勿論かくいふことは誤解を招き易い。戦争は集團抗争の關係である以上、集團の結合なくして戦争なしといふことは自明に屬する、茲にはさういふことを意味するのではない。戦争に於ける結合が集團の結果であるばかりではない。戦争に於ける爭鬭乃至武力的進撃が結合によりて生れる。此點を説明しよう。まづ戦争は一定の傾向を豫想する。所謂敵對本能又は爭鬭の本能 (instinct of pugnacity, Kampfsinn) である。けれどもこれはあくまで戦争の起り得る一の前提であるに止まる。なるほど現實の戦争がこれなくして生じないことは事實であらう、これなしとするならば人類社會に於ける抗争は自ら他の方法に於て行はれたであらうし、従つて潜在的なる戦争又は未發の戦争ともいふべき政治も亦今日とは全く異なる様子を示したであらうとも考へられる（私は此點にすら問題があると思ふ）。けれども戦争の中心たる武力爭鬭は集團的なるものであり、孤立無統制に行はるるものではない。従つて此集團性なくしては戦争がない。次に戦争は爭鬭本能に驅られたるもののみが参加するのではない、文明國の戦争についてみるに召集せられたるものの中には戦争の原因をすら知らざるものがあり、従つて個々人が憎惡の實感によつて動

競争本能に驅られてゐるとは必ずしも云ひにくい。寧ろ一般的にいへば義務なくして戦争はない。單に個人の好惡利害に従つて自由に行動するならば動物の世界に見るが如く、個人々々の争闘はあつても集團のそれはなく、又一時の遭遇對抗はあつても利害の爲の逃避が多いのではないか。此意味に於て戦争も單に集團の武力抗争とのみ定義するのは誤りでないにしても其中核を見失ふ恐れがある。戦争は飽まで集團自體の爲に營まるる従つて義務を中心とする武力抗争である。

此點から見て動物間に於ける争闘の分布は極めて興味深きことに屬する。戦争を動物の世界にまでひろげて考ふるについては異論もあらう。事實上精神をもつものと、たぬものとに於ける武力抗争は自ら異なるものである。けれどもかの外面的特徴から見ると、若干の動物には之を戦争といつても甚しい差支のないものがある。大抵の動物は死闘をさける。争闘は食物の爲に起るよりも多くは異性の争奪より來る、而もそれは死闘的ではない。社會の結束が強固にして個體がその分肢となるところにのみ死闘があり、而もそれは集團的に行はれる。

蟻蜂の如き一有機體に近きほどの本能的結束を保つものが戦争をする。人類の戦争は全くその團結従つて義務の結果なりといはざるを得ぬ。近代の戦争を見よ。参加するものは義務の爲に参加する、而して實戰に臨むに至つて争闘本能の作用がよく支配する。此點から考へて戦争は集團即ち結合の一面なりといはざるを得ぬ。結合なくして戦争はない。これは戦争が集團的行動であるから集團なくして戦争なしといふことをさしていふのではないこと、前述の如くである。戦争は集團の結束あるが故にのみ發する。いはゞ戦争の精神をなしその中核をなすものは集團である。一層適切に又身近に表現すれば、結合そのものが戦争に入りこませる。對外の戦争に於ては

國家が、内亂和戰にあつては一の部分的集團がさうである。此集團的自我がその要求の爲に立ち上つて戦争に入る。たゞ此集團的自我が意志的に立ち上り戦争に入りこむに際して、此意志決定が如何にして行はるるかについては、種々なる場合が考へらるるであらう。其一方の極端には全國民的な輿論の勃發支配がある、他方の極端には支配者單獨の意志決定がある。此間あまりに差異あるやうであるが、其實は必ずしもさうではない。專制者が自己の爲に戦争をはじむることはある、けれどもこれは國民が豫め全人的に其服従をこれに捧げてゐる結果である。專制者は自己の爲に戦に入るといへども、それは常に集團の名に於て、又は其代表者としてさうするのであり、勝敗は集團の盛衰を意味する。それゆゑにこそ民衆はそれに從つて、戦争に入るのである。國民の輿論とても指導者なくして戦争に入ることではないであらう。指導者が決定に際して個人の利害をとり入るる程度の差はあれ、集團の自我をまたずして戦争はない。而して此自我が何を求むるがゆゑに戦争に入るか。これは普通に戦争の目的といはるるものである。

戦争が經濟的利益の爭奪に基くとは屢々主張せらるるところである。經濟的なものが戦争と密接の關係を有することは疑ふべくもない。けれども、例へば宗教戦争（十字軍や、同教徒の戰、日本に於ける僧軍の對立）の如き經濟以外の事情にもとづく戦争があり、又は低級の民族に見るが如く幾十年の久しきに亘つて繰返さるる復讐戰があることを考へねばならぬ。又經濟的にはあまりに些細の利害にもとづいて大規模の戦争が勃發することも多い。これらのことから推すと、戦争が經濟的原因に基くといふ見方は近代の合理的なる生活の反映に過ぎぬのではないかと考へられる。戦争の原因は内容的に見ると種々雑多である。その何れも戦争をひき起し得る。けれど

も、その何れもが戦争をひき起し得るといふことは、何れもが單獨には戦争をひき起し得ず、單に一の機會を與ふるに過ぎぬことを意味する。さうすると戦争の根本的原因は何であるか。それは集團的自我的優越要求である。いはゞ集團自體の勢力意志である。それが侵害せらるるとき、換言すれば此意志に基いて相手に一定の態度を要求するが、此要求が侵害せらるるところに、此自我がたつて全力をあげて相手に立ち向ふ。従つて戦争そのものは相手の集團の人格を前提し相互の要求の理解を前提とする。相手を人格として認めざる武力行使は狩獵にして戦争ではない。而して此集團的決意なくしては戦争もあり得ない。此點からいふと、利害の爭奪又は衝突といふが如きすべての内容的なる事情によつて激發せらるるとき、集團的自我的活動が戦争の形をとる。もとより戦争は決してこれが唯一の方法乃至形式ではない。それが戦争の形式をとることについては、争鬭の本能といふものが強く作用するであらう。けれども此本能とても戦争の起りうる、又進行し得る一の條件であつて、それが盲目的に戦争をひき起すといふのではない。戦争が經濟的利益に基いて起るといふのは前にも述べたるが如く、唯物史觀的な説明である。これが現實の歴史を説明し得ざることは一般に認められてゐる。戦争をひき起す内容即ち生活上の利益は極めて多方面であり得る。而して極めて屢々單なる形式的理由から、即ち復讐戦争或は體面の戦争の如く、戦争そのことの爲に、戦争が行はれる。そこで戦争の原因を形式の方面に求めようとする意見が成り立つ。敵對本能そのものの充足の爲に戦争が起るとするのは、其最も代表的なるものである。けれども前述の如く、敵對本能が戦争の不可缺の前提であらうことは争ひがたい。ただ多くの戦争にあつては、敵對本能の衝動によつて戦争が起るといふよりも、戦争に入つて敵對本能が刺激せられ敵對感情が高潮するとも

云ひ得る。ことに近代文明に於ける戦争の多くは憎みを知らざる戦争であるともいはれてゐる。なるほど歐洲の近接地諸民族間に於ける戦争のあるものは確にさうであらう。以前の時代に於ても、帝王の功名心、四周征服の野心によつて生じたといはるる戦争の如きは、さういふ性質を帯びないであらうか。シユムペニアの帝國主義論に於ては、戦争が形式的要求に基くことを認める。けれども、此形式的なるもの、いはゞ争鬭の本能が經濟的事情に無關係でないことを説く。其見解によれば、戦争も帝國主義も、なるほど有史以來の事實について見るに、争鬭又は敵對の本能に基いてゐる。けれども、それは一種の先祖がへりである。このアタヴィズムの根柢をなすものは、かつての戦争によつて養はれた當時の性質である。かつての戦争の原因となれるものは經濟的事情である。繰返していふとかつての時期に於て經濟的利益の争奪から戦争を繰返したことが敵對の本能を生じ。これが近代に於ては戦争を促し帝國主義的活動に入らしめる。此見解はある立場からは一種の經濟史觀であるともいはれる。現代の經濟が現代の社會を決定するのではない。ただ過去の經濟が人間の習性に及ぼしたる影響を通して現代の社會を支配するといふのである。けれども、此見方は之を事實と調和せしむること困難ではないか。戦争は原始に於けるよりも未開フエグの時期に於て遂に一般であると稱せられる。私はかつて之を人口の増加に伴ふ食物の缺乏を以て説明しようとした。此説明の當否は自ら別の問題であるが、原始が相對的に平和の時期であるといふことは大體認められたる事實と思はれる。さうすると此未開の時期に於て頻發したる戦鬭が争鬭そのものの要求を生み、それが現代を動かしてゐると見るのが此理論の順序である。けれどもこれは獲得性質の遺傳に關する一の問題を伴つてゐる。次に立説の本來の主旨が更に古き時代に於ける事實によつて現代が決定せらるる

といふのではなかつたか。さうすると、原始の相對平和説は此主張の根本を危くすることはないか。要するに現代に於ける對立抗争が形式的要求に基くことは争ひがたきものとして、その起原を説かうとすると種々なる困難に陥る。之をかつての社會的事情に求めようとすると、原始平和説が若干の困難を示すといふことになる。恐らく、争闘本能乃至敵對本能を與へられたるものとして出發する外はないのでないか。かくいへばとて、此考方はそれについての説明を斷念するのではない。われらの祖先にとつて恐るべき敵は人間以外のものであつたらうと思はれる。自然の暴威もさる事ながら、異種の生物こそはまづ取除かるべき敵であり、それとの争闘對立によつて人類は今日あるを得た。人類の勢力意志はその間に愈々強きを加へたものではないか。敵對本能が争闘の間に成長したとしても、われらの祖先にとつては自然も亦生命を有し萬有は精靈を宿してゐる。生物の戦は一種の争闘であつた。かう考へて來ると、敵對本能を人間の戦争の遺物として説明することの困難から免れることが出来る。而して原始の相對的平和と野蠻の争闘とをとともに、社會的事情の變化に負ふものとして説明し得るであらう。

集團の團結(ことに部族氏族等の血族的紐帶をもつ社會の團結)から今の場合にとつて重要な二のものが結果する。その一は集團に對する義務の強化である、個人は集團そのものに對して無力であり、その命するところの義務を守らざるを得ぬ。その二は集團的自我の意識である。此自我が勢力要求を伴ひ、それによつて成員を拘束することはいふまでもない。さて此集團的勢力意志が其侵害に反撥し、又は其充足と自信とによつて昂揚するところ、成員はその爲に戦はざるを得ぬ。而もそれは成員個々のものが争闘の要求に燃ゆると否と問ふところでは

ない。此集團の命令に對しては絶對的に從屬せざるを得ぬ。戦争はまさしく此の如くにして起る。従つて、戦争の根本的な動力と見るべきものは集團の勢力意志であり、集團の勢力意志をこゝまでに高むるものは其團結である。此意味に於て團結こそは戦争の原因であるといひ得る。

此の如く、根本に於ては團結あるがゆゑに戦争は生ずる。戦争は人類特有の現象である。高等の動物にあつても其争鬪はかゝる大規模の死鬪に入らぬ。強ひてこれに類似するものを求むれば、極度に團結的なある種の昆虫のうちにある。戦争原因論はまづこれらの事實に解答を與へねばならぬ。而もこれは經濟原因論に出来ることではない。たゞ團結が戦争を生むといふ理論のみ之をよくするであらう。けれども、團結と戦争との間には前者が後者を生むといふ一方的の作用のみがあるのではない。他方に於て戦争はまた著しく團結を強化する。これは詳細なる説明を要するとも思はれぬ。戦争の必要の爲には全力を集中せねばならぬ。此必要は成員の上に無上の命令として臨む。このことは戰鬪行爲の最中に於て認めらるるばかりではない。戰鬪の背後にある全民族の生活について亦認めらるるところである。此點から見ると、戦争は集團の意識を強め従つて個人意識の自由なる作用を壓迫することとならざるを得む。個々の成員はその人格の愈々多くのものを集團に向つて捧げざるを得ぬ。これだけのことを前提とすることによつて、戦争未開期說に若干の説明を與へ得ると思ふ。戦争は集團の團結の所産である。その意味に於て低級の段階に於ても缺けるのではない（シニティンメツ）たゞかゝる段階に於ては人口稀薄である結果、異群相互の接觸がそれ程頻繁でなく、必要あれば容易に隔離して生活を營んだであらうと思はれる。人口漸く増加するにつれて生産力亦高まり、従つて異なれる集團の接觸は愈々頻繁とならざるを得ず、

かつて隔離したるものが増殖によつて新なる交渉をもつこととなるこれが戦争を繰返させる原因となる。而も此戦争が進みては社會の結束を強め、個々の人格の社會への吸収を強度ならしめる。かくて戦争は未開の時期に作られたのでもなく、又争鬭の本能は戦争によつて養はれたのでもない。いはゞ此本能は人間そのものの本質に屬するに拘はらず、戦争が未開の段階の特徴と見らるる次第である。

三

戦争の本質について述べ、その原因について述べたのであるから、轉じてその作用又は結果に粗雑なる概觀を與へてみよう。それを心理的な方面、社會的な方面及び文化的な方面の順序に於て考へる。まづ心理的な方面について。これについては屢々見らるる見方がある。戦争に於て争鬭の本能が極度までに作用する、これは人類の遙に低き段階に於て成立しそれを指示するものである。而してこれと相結びついてゐる種々なる傾向、いはゞ文化の發達をまたずして成立したる諸傾向が強く作用して來る、文化の點から見て低級なる作用、別して社會の秩序、幸福とは反對に向ふ本能在自由に作用して來る。同様の見方ではあるが、之を更に巧妙に説明するものがある。人間の心理にあつては各要素的な傾向が漸次に發達し集積して層をなしてゐるが、戦争の如き非常の時期に遭遇すると、自我の強き意識によつて統制を保ち組織を保てるものが攪亂せられる。而して其最も上層にある、從つて高き文化によつて成立したる層が弱められる、それらは漸次に脱落して作用を失ふにつれ、いはゞ低層を占むる原始的なる要素が強く作用するに至る。かゝる考方は之を事實に近く述べるとかうなる。戦争に於て人々は高級なる傾向を失ひ漸次に野蠻人乃至未開人として作用するに至る。強暴、殘忍、暴行、無知といふ

如きものが自ら支配する。けれども冷静に考へると、これは戦争の特殊なる側面だけを考へてゐる。加之、これらの主張とても、たゞ戦場に於ける心理を述べたるばかりで、背後の民族乃至集團について述べたのではないと思ふ。進みて考ふるに、戦場に於ける心理とても、かゝる特別の人間に化し去ると見るべきではあるまい。戦争に於ける指揮が味方の全力を集中し、敵の克服の爲には手段を選ばずといふ精神を含む以上、敵の軍隊に對し、又その背後にある非戦闘員に對してすらも、自ら（内部に於て即ち國內秩序の上から見て）原始野蠻と見らるる行動に出で易いといふことは自然の勢である。われらは歴史上の戦争に於て低級なりと見らるる行爲の多くを見る。けれども、これはたゞ社會的な統制の力がどこまで及ぶかといふことによつて容易に説明し得らるる事實であらう。戦闘行爲の最中にあつて、敵と之を支援する集團に對して假借するところなき態度をとるのは必然のことである。ただ占領地區に於て如何に行動するかといふことは、軍紀がどこまで引締まつてゐるにかゝる。軍紀が嚴重に保たるとき、そこには異なる人格が成立すると云はるる餘地はない。士卒の行動を若干とも放任する方針をとるが、又は統制の行届き得ざるときには、秩序なき行動が行はれ低級の人格が支配するかの如く見えるけれども、これも決して心理の轉換を考へさせることがらではない。況や、戦争が銃後の民族又は集團の心理に及ぼす作用としては、かゝる心理の轉換を云々し得る餘地はない。たゞ個人的自我の抗争對立の意識は弱められる、群居性に屬する諸種の傾向、即ち從屬、模倣、調和等の傾向が強められる。それとともに精神の自發的創造的な活動は個我的意識の弱まるとともに減弱せざるを得ないであらう。いはゞ精神の高級なる層は萎縮する傾向をもつと見られがちである。而して感覺の層に於ける減弱が考へられる。少くも此方面を重く見、又は

それに強く支配せらるることがなくなる。これは社會の意識が個々人の感覺内容に捉はるることを禁壓するからである。要するに、個人的自我を中心とする感覺の層に於ける減衰が起り、社會を結束するところの層に於ける諸活動が高まる。殘忍強暴といふものとは自ら反對の方向に進むと思はれる。

戰爭の社會即ち人間結合の上に及ぼす作用はあまりに顯著であり、又あまりに多方面である。こゝにその全面を盡しがたいと思ふが、その中の重要な點を論じよう。これには二の方面がある。一は戰へる民族又は集團内部のことがらであり、他は戰へる民族又は集團相互の關係に屬する。まづ考へらるべきは前者である。戰爭は何よりも集團の結束を強化する。この平凡にして公認せられたる事實に若干の説明を加へよう。これには自發的な一面と、強制的なる一面とがある。戰爭は何よりも集團的な自我の昂奮である、それが激情的に相手を克服しようとする行動である。此集團的自我の意識が成員の意識をみだし、之を強く支配する。われらの祖國の爲に、又はわれらの集團の爲にといふ要求が各個人を支配する。此集團意識の昂揚は自ら個人の個我としての意識を壓伏する。そればかりではない。この集團意識の支配に伴ふ表現は暗示模倣によつて強化せらるるのみならず、集團は之を高調し旌表し周知せしむるが故にそれは一の情意的潮流をなし、何人をも流しこまざれば止まぬ。驛々に於ける歡呼の聲、ラヂオの放送、新聞の文字、これらはすべて國民乃至集團の意識を一色に塗り盡す。個人はたえざる一種の緊張と昂奮とを以てつねに内に此集團的自我の動きを見つめこれに従つて動く。これは自發的な一面である。勿論上に述べたところは理念型的なる敘述であるから、具體的な個々の人々についていへば、それとは異なる方向に動くこともあるであらう。別して戰爭の相手が弱く、必ずしも全力を注ぐこと

を要せずといふ場合には、集團的自我的燃焼強きに達せず、個人の意識に弛緩が感ぜられる。經濟的には戦争が多く利益の増加を伴ふところから、かへつて享樂の程度を高めるといふこともある。けれどもその限り、これは戦争に入りこまぬものとして、即ち戦争の支配乃至實現が十分ならぬ状態として取扱はれ得るであらう。

戦争は他面に於て強制による統一を作り上げる。相手に勝つ爲には集團のあらゆる力を集中せねばならぬからである。これが爲には内部に於けるすべての抗争が禁壓せらるるとともに、國家乃至集團に對する忠誠が要求せられる。こゝに集團的自我的威力は極度までに發揮せられざるを得ぬ。かくて戦争は自發的にも集團的自我による統一が強化せられつゝあるところに作用して、強制によつて此統一を保障しようとする。これによつて二のことが生ぜざるを得ぬ。一方に於ては部分社會の對立又は不和が著しく解消せらるることである。對立そのものが抑壓せらるるばかりではない、戰へる集團の意識が個人の意識を強く支配するほど、對立してゐる要求が潛み去る傾向をもつであらう。他方に於ては社會のすべての活動が組織化せられてゆく。この組織化の能力即ち生活合理化の能力は最近の段階に於けるほど顯著である。而もそればかりではない。此組織化とともに統制乃至指導の關係が容易に確立せられる。從屬調和の傾向が一般に支配する地盤があるところに集團は組織化の必要を認め、而も此組織は統制が嚴重に周密に行はるるほど有效である。スペンサアのいへるが如く協働は組織化せられ計畫化せらるるとともに、統制の爲の上下の組織又は體統が嚴密に作り上げられる。いはゞ集團の統一の強化は絶頂に達するとともに、軍事型の社會と稱せらるる強制の關係は容易に確立せられる。

けれども戦争のかゝる統一化作用については、其効果が決定的なる作用を及ぼすことを忘れてはならぬ。引き

つゞき勝利が得らるる場合には、軍事上の指揮者に對する、又同時に支配幹部に對する信頼は増加し、集團的自
我の昂揚は強化せられてゆく。従つて良好なる戦果は愈々その統一を強化するといひ得るであらう。けれども、
戦争の結果が味方にとつて不利となるや、そこに複雑なる事象を生ずるであらう。集團の統一が本來如何にして
得られてゐたかといふことによつて結果は著しくことなる。又戦争の性質によつて異なる。戦勝の見込がたつて
ゐる場合に於ては、内部の統一の強化せらるること、無名の師なると否とに關はりはない。集團は一定の理由
を意識して戦ふといふよりも寧ろ集團的自我の爲に、その擴充の爲に戦ふものである。多くの場合に於て戦争の
理由は開戦の後一の觀念形態として、いはゞ派生體として作り上げられ、その根據づけの役目を果してゐる。
たゞある場合には、集團の成員に至るまで相手に對する屈辱を思ひ、相手に對する復讐を誓ふといふことがあ
る。いはゞ戦争が民衆の感情に基礎をもつことがある。また集團の生死に關する利益が此戦争によつてのみ確保
せらるるといふが如く、戦争が成員の要求に著しく支持せらるることがある。かゝる場合に於ては、戦敗つゞ
くといへども、なほその結束を維持し得ると思はれる。けれども集團の結束が強制によつて維持せられて居り、
内部に利害又は感情の上の對立をふくんでゐる場合に於ては、若干の敗戦にも容易に其團結を破壊せらるるこ
とがある。それゆゑ、戦勝つか又は勝敗の分明せざる間は内部統一の強化が進行する、これについては戦争の理
由如何も殆ど關するところがない。之に反して戦愈々敗るゝとなるや、戦争に對する反省も行はれようが、何よ
りも成員の不滿が醗酵して来る。本來の團結強固なる場合にはこれを抑へ切ることも可能であるが、これに對す
る抵抗は集團の同質性、内部利益の連帶等の諸紐帶の力によつて支配せられる。従つて戦敗ると強制の統一化

作用が弱まり、それによつて内部の不満が作用し出すと、戦争自体は愈々不利となる。戦勝そのものは組織の幹部、別して指揮者の威信と尊貴とを加ふるとともに、今後の戦争繼續に於ける勝利の見込を與へ、此見込は全體の結束を加へる。ことに此見込が團結によつて辛じて勝利が得らるべしといふときに然り。戦勝と統一とは相助長する、同様に敗戦と分裂、ことに支配者勢力の失墜とはまた相助長する。戦敗による集團の分裂がどこまでに進むかは、今まで權力の強制によつてどこまでその統一を強化し得たかにかゝること前述の如くである。自然的なる乃至自發的な紐帶による團結が残存することはいふまでもない。

戦争の社會的效果として重要なものは、寧ろ兩集團の關係にある。戦争に於ける敵對關係についてはこゝに説く必要もない。たゞ戦後に生ずる關係の如何なるものであるかを考へる。これについては、まづ考察を簡單ならしむる爲に、主として近代以後を眼中に置く、述ぶるところは有史時代にあてはまり得るつもりである。

戦争の結果として、一方の集團が他方の集團の中に吸収せられ、他方の權力の下に統一的なる組織の一部分となることがある。その結果如何は別に考へよう。こゝには勝敗兩集團が相ならび存する場合を考へる。兩集團の間には私闘的な結果としての怨恨、憎惡、反感をのこすことはまづ少いと考へられる。それは戦争に於ける活動がすべて義務の爲の活動であり、獻身犠牲としての行爲であることを共に理解してゐる結果ではないか。たゞ軍紀みだれて必要以上に殘忍の行爲を民衆に加ふるが如きことあれば、その結果は自ら別である。戦争が一方の完全なる敗北に終る場合にあつては二のことが生ずる。第一。一方の反抗乃至對立の斷念である。抗争しても見込なく、徒に人命と物資とを費消するのみと見る場合に於ては、出来る限り平和的な關係をつゞける外はな

い。集團的自我の勢力意志は消滅しないであらう、けれども、下層にある個人のそれの如くに作用を表面にあらはさぬ。第二。成員の個人的意識の中にはその勝利を得たる集團に對する尊敬の念を生ずる。ことに其勝利の原因たる事象に對する模倣の傾向がつよまる。加之、戰爭による相互の接觸は相互の理解を高める。戰爭は内亂の場合を除いていふと、平素あまりに交渉をもたぬ集團別して國民を密接なる相互作用の中に入らしめる。全力をあげて相手を克服しようとするのであるから、それ自體としては結合的のものではない、相互の愛着や協働を意味するものではない。けれども戰ふ爲には相手の動きを知ることを要し、又戰地に於ける民衆との交渉も加はる。このことが相互の理解を深めるばかりでなく、自ら文化内容の授受が無意識の間に行はれる。戰ふものは互に義務の爲に、集團的自我として戰ふことを知る。武士は相見互ひといふことは國內の争鬭にのみ限ることではない。戰場に於ける武人の情けといふものは一方に於ては人類的なる情緒でもあらうが、他方に於ては而して本質的には義務の爲に一身を捧げたるものに對する尊敬であり、而してやがては自己の運命であるかも知れぬといふ同類意識である。とにかく戰爭は兩集團の成員相互の間に接觸を繁くし、そこに魂の交流ともいふべき生命層に於ける結合を促し、又文化内容を取交させ相手の文化に對する親しみを植ゑつける。戰爭の結果を見るに集團的自我としては大抵の場合、對立の關係が存続するのみであり、たゞそれが表面的なる抗争から潜在的なる對立即ち武裝的平和の時期に入る。之に反して成員としての個人相互の間には理解が進み結合が加はると見るべきではないか。もとより、集團間の結合分離と成員個人間のそれとは多くの場合相平行し相助長する。けれどもある程度までは相對的な獨立性をもつて動くのではないか。今の場合の如きもその一例をなすものと思ふ。